

畜産環境問題と有機性資源循環の研究推進

日本畜産環境学会理事長 日本獣医畜産大学客員教授
扇元 敬司



現在、我が国の畜産に求められているもっとも大きな命題は、地球環境との調和であります。しかし、厳しい経済情勢のなかで生産性と経済性の追求を避けて通ることはできないことから畜産環境対策だけに注力することは困難です。その結果、畜産環境が人間生活の公衆衛生、精神衛生の両面からさまざまな影響を与えています。一方、家畜の生産性決定には家畜を取り巻く環境が重大な要因となりますが、国土面積、地勢、人工密度など制限因子の多いわが国においては、家畜に快適な環境を与えることは容易ではありません。技術的、経済的に越えなければならない障害は多く残されていますが、動物にとって快適で、しかも人類に直接・間接的に無害で、むしろ廃棄物のリサイクルなどを通じて環境保全機能を持つ畜産環境を創生することが理想です。現在、地球環境保全は、すべての産業を行う上での大前提であり、畜産においても地球環境への調和なしには存続できないことが広く認識されています。1993年9月に設立された日本畜産環境研究会では約8年間にわたる活動を通じて、畜産環境問題の認識、畜産環境保全に関する研究の基礎的および応用面の理解、畜産環境研究者の交流や他分野からの研究者の参入などに広く貢献してきました。

しかし、現在もなお畜産による環境汚染は深刻な問題であり、具体的な解決策が早急に求められています。方策の立案やアイデアの発掘には、研究の推進が不可欠であり、根本的な問題解決には科学的なアプローチが必須です。とくに畜産環境問題の解決には分野を越えた研究成果の結集が必要と考えられます。このような現状の反省と将来の展望から畜産環境問題にかかわる多方面の研究推進母体となるべき確固たる組織が必要であるとして、2001年6月には日本畜産環境学会が創設されるに至りました。この学会活動の一環として本年2002年6月に東京都内において設立記念大会が開催され、一般会員のポスター展示による研究発表や賛助会員による企業展示と共に「記念フォーラム：畜産環境学の将来像」が行われました。記念フォーラムでは、これまでの畜産環境に関する研究の位置付けや発展方向について畜産環境整備機構・信國卓史氏をはじめ各分野の方々にご講演をいただき、約200名の参加者に多大の感銘を与えました。さらに本年9月には北海道バイオガス研究会と共催による「サテライトフォーラム2002」が帯広市で開催されます。ここではバイオガスシステムの現状と課題に関するシンポジウムとプラント現地見学会が行われます。また10月に秋田県立大学が主催する「有機性資源循環利用国際シンポジウムin秋田」には日本畜産環境学会が後援団体となる予定になっています。今後、本学会活動は既存の学会や研究会の境界領域であった畜産環境問題および有機性資源循環に関する諸課題研究の推進母体として機能を発揮する方向を目指したいと考えています。

【引用文献】

日本畜産環境学会設立趣意：日本畜産環境学会レター第1号、5～6頁（2002.3）